Start & Challenge

聴覚障がい者向けにカフェ&講演会&交流会

「ハンズ・プレイス」（竹林伸子代表）は、聴覚障がい者の支援に加え、当事者や支援者が協働で対等に学び、活動できる場の設立をめざし、社会福祉士で精神保健福祉士・手話通訳士でもある竹林さんの呼びかけで29年に発足、現在約45人の会員がいる。

健康体操を習う参加者

同会では、昨年度の市民公益活動事業補助金のスタート補助金でカフェやランチ会を開催、聴覚障がい者と支援者の交流を深めた。今年度は引き続きチャレンジ補助金を受け、介護予防運動の専門家を招いてハンズ・カフェ&講演会&交流会を8月19日㈰に西河原公民館で開催した。当日は、会員など30人が参加、熱中症などについての講演と中高年向けの健康体操に加え、お茶を飲みながら交流を行った。ハンズ・カフェは来年3月にも催す予定。

同会では毎月2回、狛江市市民活動支援センターや市内の公共施設でデイサービスやランチ会、情報交換をするカフェを開いており、9月8日㈯には和泉本町1-25-5シャテロF102に拠点となるハンズプレイス・カフェがオープン。デイサービスやランチ会、体操教室やハンズサロンなどを行う予定。

問い合わせ☎4500-0216Ⓜhandsplace0422@gmail.comハンズ・プレイスHPhttp://hands-place.site

子どもの学習を支援するフリースペースを開設

こまえ学習サポートプロジェクト（住友和子代表）は、勉強する場所や教える人など整った学習環境を提供し、子どもの学習をサポートしている。狛江市社会教育委員の会議が2年間試行した学習フリースペース事業を引き継ぐため、社会教育委員のひとりだった住友さんが市民団体を立ち上げた。

中学校の定期テスト直前の土曜午後に岩戸地域センターと野川地域センターで学習フリースペースを開催、平成30年度市民公益活動事業補助金のスタート補助金を会場費や印刷費にあてる。参加は無料で、予約の必要なく、出入りも自由で、小学生や高校生も利用できる。スタッフはボランティアで、元教員の主婦や定年退職後の男性などさまざまな市民10人が参加している。

野川地域センターの学習フリースペース

開催時には、文系と理系の教科を教えられるスタッフが必ず入るようにし、子どもの質問に答えられる体制を取っている。5月と6月のフリースペースにはのべ31人の子どもが参加、熱心に勉強に取り組む姿が見られた。住友さんは「子どもたちの自発的な学習意欲を大切にしたい。おとなの力で子どものやる気を応援し、自由に来て勉強できる場の常設をめざしたい」と話している。

2学期は9月22日㈯に野川と岩戸の両地域センター、11月10日㈯に岩戸地域センター、11月17日㈯に野川地域センターで開催する予定。時間はいずれも午後1時～5時。

問い合わせ☎090-1259-0708住友さん。

平和を願い手話付きの合唱

平和な未来へ誓い新たこまえ平和フェスタ開催

こまえ平和フェスタ2018が8月12日㈰にエコルマホールで催され、360人の市民が参加した。こまえ平和フェスタ実行委員会が毎年催しているもので、ことしで14回目。

「平和な未来を子どもたちへ」をテーマに、市内の戦争体験者・寺尾浩次さんによる「18歳、最後の二等兵」と題した体験談、狛江市平和都市宣言朗読劇など平和にちなんだプログラムに加え、手話付きの合唱やきんたの会のエイサーが披露された。パネルディスカッション「平和ってなあに～コスタリカから学べることは～」では、高校時代に同国へ留学した大学生の岡野奏子さん、国際ジャーナリストの伊藤ちひろさん、同フェスタ実行委員長で俳優の二階堂まりさんの3人が、軍隊を持たない国として注目されるコスタリカについてそれぞれの経験をまじえながら紹介した。

ホワイエでは狛江市歌「水と緑のまち」の作詞家加藤弘さん（故人）の追悼展示、平和を願う貼り絵、公募による川柳・俳句・短歌・絵手紙、原爆写真、空襲の記録、沖縄の米軍基地、福島原発事故被災者の状況などのパネルが展示され、多くの人が熱心に見入っていた。

親子で石けんづくり挑戦岩戸町会の環境衛生部

岩戸町会（片平栄司会長）が8月4日㈯に岩戸地域センターで親子石けんづくり教室を開催、同町会の親子など約20人が廃食油石けんをつくった。

親子で石けんづくり

同町会の環境衛生部（神原良子部長）では多摩川統一清掃や環境月間のイベントへの参加、環境施設見学、二酸化窒素の測定など環境に関するさまざまな活動を行っている。20数年前から会員を対象に、古くなった天ぷら油などを使った洗濯用のリサイクル石けんづくりの講習会を毎年開催しており、自前の石けんを使う人も増えている。

こうした取り組みを次の世代に伝えようと、昨年の夏、子どもを対象に親子石けんづくりを初めて開催し人気を集めた。

教室では粉ミルクの空き缶に廃食油、かんきつ類を煮出した汁、か性ソーダを入れて木の棒で約30分かき回した後、粘りが出てきた液体を牛乳パックに入れた。液体が固まり、石けんになるまで半月ほどかかるため、この日の作業は終了、参加した親子は牛乳パックを大切そうに持ち帰った。

まち

参加した子は「天ぷら油が石けんになるのは不思議。早く取り出して石けんを使いたい」と話し、神原さんは「身近にあるものがリサイクルできることを体験してもらい、資源を大切にして環境にやさしい生活について考えるきっかけにしてもらえれば」と話していた。

市役所ひろばで盆踊り いずみ会が設立50周年

夏の風物詩・盆踊りが4日㈯と5日㈰夜、市役所市民ひろばで催され、訪れた浴衣姿の家族連れなどがひろばの中央に組まれたやぐらの回りに輪をつくり、狛江音頭や東京音頭、炭坑節などの踊りを楽しんでいた。

この盆踊りは、いずみ会（白井伸幸会長）が昭和55年に狛江駅北口にあった狛江第一小学校で開催、一小移転後は市役所へ会場を移して続けているもので、地域の夏の行事として親しまれ、住民同士の貴重な交流の場となっている。

市役所市民ひろばに踊りの輪

ことし設立50周年を迎えた同会は、伊豆美神社の祭礼や多摩川ばやしなど地域の文化の保存と継承に取り組むとともに、地域コミュニティーの醸成に貢献している。

くらしの知識を伝授 狛江のまちゼミ開講

狛江市商工会が「狛江のまちゼミ」を開催する。

市内の商店主などが講師となって暮らしに役立つ約20のワンポイント・セミナーを10月13日㈯から11月10日㈯まで実施する。

参加は基本的に無料（材料費などは一部有料）で、申込受付は原則として10月1日㈪から。詳しくは狛江市商工会で配布するパンフレットか、コマエリア（https://www.komaeria.com）、狛江市商工会サイト（http://www.komaec.net）で。問い合わせ☎3489-0178狛江市商工会。

陰の歴史にスポット 8日に登戸研の講演会

知られざる狛江の歴史を後世に語り継ごうと「風船爆弾－平成の時代からみる登戸研究所の姿」と題した講演会が8日㈯午後2時30分から泉の森会館で催される。

登戸研究所は、現在は川崎市多摩区の明治大学生田校舎になっている場所にあり、旧陸軍兵器行政本部下の第九陸軍技術研究所として風船爆弾や偽札、毒ガスなど主として謀略戦に使う秘密兵器などの開発に携わり、狛江からも多くの人が働きに行っていた。

泉の森友の会が、ほとんどの市民が知らない陰の歴史にスポットを当てようと講演会を企画したもので、明治大学平和教育登戸研究所資料館館長で文学部教授の山田朗さんの講演のほか、同研究所に関わった狛江の関係者が当時のエピソードなどを語る。入場は無料。

問い合わせ☎5497-5444泉の森会館。

店舗めぐり ◆70◆

ポンプや浄水器の製造・開発に高い評価

かりはな製作所

田中橋交差点近くにあるかりはな製作所（中和泉3-28-1）は昭和26年に創業、ポンプの設計製造や災害用浄水器の製作に加え倉庫業を営んでいる。

創業者の芟花政記さん（明治26年～昭和48年）は、福島県双葉郡双葉町の農家に生まれ、小学1年の時に医者を志し横浜市の伯母の家に下宿して学業に励んだ。その後、機械工学のおもしろさに目覚めて立教大学の前身校に進学、先輩が勤めた荏原製作所に入社、ポンプの製作や送風機などの開発に携わり、同社の成長を支える存在となった。

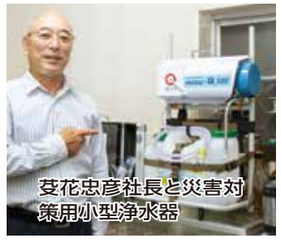
政記さんは26年に58歳で同社を退職、現在会社がある妻の実家の土地に工場を建設、荏原製作所の指定協力工場として創業、翌年に株式会社かりはな製作所を設立した。

息子の忠男さん（大正15年～平成15年）は、機械技術の専門学校を卒業、別の会社に就職してポンプ関連の技術と知識を深めた。2人の兄が亡くなったため、父の起業時に自身も退職して協力した。荏原製作所だけでなく、大手建設会社の各種ポンプの修理や設計変更、改造も手がけるなど、業績は順調に拡大した。35年には現在の市役所近くに工場を増設、従業員も増やした。

昭和20年代後半頃の工場

「自社で開発した製品を作るメーカーになりたい」と考えていた忠男さんは研究開発に力を入れて軸受けメーカーとして基盤を築き、防衛庁（当時）や理化学研究所などからも仕事を受注するまでになった。その後も、プラスチック製品製作、電子部品製作など時代に合わせて分野を拡大した。

忠男さんの長男で現社長の忠彦さん(62)は、幼い頃から工場で遊び、小学校高学年からオートバイや自動車に親しみ、エンジンを組み立て直して改造、玉川大学工学部在学中にはオートバイレースに出場した。大学卒業とともにかりはな製作所に入社、見習い工員として約2年間、旋盤、フライスなどの操作を習った。この時の経験が後の仕事や経営にも役立っているという。


芟花忠彦社長と災害対策用小型浄水器

60年代に入ると経営に陰りがみえたが、機械の保管や在庫管理、発送業務などを行う倉庫事業を始め、業績を回復させた。

平成4年に社長職を継いだ忠彦さんは、災害対策用小型浄水器「mizu-Q」を開発、全国の学校や老人福祉施設などに販売して好評だ。現在、さらに家庭用の災害対策用浄水器も開発中。

忠彦さんの長男で専務の英寿さん（36）は玉川大学工学部を卒業後にコンピューター関連会社に就職、システム開発を勉強して28歳で同社に入社した。主に倉庫部を担当し、倉庫への搬入から搬出までを一元管理するシステムを構築中だ。

忠彦さんは「小さな仕事をコツコツ続ける日々の努力が、顧客の信用、信頼につながった。また従業員を信頼して任せてきたことが良かった」と話している。

かりはな製作所　☎3489-5211
営業時間=午前9時～午後6時　土・日曜・祝日休み。

昭和26年に創業／独自の製品作りめざし研究開発に注力